訓幼字義

三

續々群書類從

教育部

中山閲了

口仁13
1.620
3

門口仁13
1.620
3



ばなり

古の経書にんと説てく甚はなはだ多し。詩経よ中にんを羞ふ書経よ文武王にんをつかさどる礼記に何をを浪費のこと勿れ。又夫よにつるこにあり。論語よんと説てくるとづふ多あり。七十後にん所欲不踰矩をんを三月不違仁をつかんの沙汰よあづかるこ多をどもを。孟子に簡在帝心。毋所用心。有心弟子。数手数石の類に何ををひろくんと説ることのみてく。善悪の沙汰よ物よづどいみへの聖人当ろこと知て則こてんとうつみざるこ大畧をこ

古の書よんとつこ。そろこ已後の上よ於て出をとこ知て未

殺乃ちんとつこ。書経の洪範よ事と来て。貌言視聽思

しつゝ人のゐる事を挙て思ふべしゝ
人の思をさしてつゝ孟子にいへる官則思思則得不思則不得也
とあるこの義の思ゐるところと引て義〳〵ところ〳〵志べし又大学
の正心の章にも忿懥恐懼好楽憂患を引て〳〵ところ〳〵とあるも
古来皆已殺以後のことゝ思ふ〳〵来殺を引て〳〵ことゝ思ふ猶敵の
いまだ殺と生さるとを石火のいまだ出えをあつるごとくこれのごとく心
心寂然不動ゐて一念を起さゞるごとくこれをつゞふ思ゐ
ゐるこゝをたゞふ已殺のことゝ思ふ〳〵いんや忿懥恐懼等の後
ゐるこゝをつて未殺しつゝ思ふ〳〵ずゐふ古人の書に何事を思
とこの義〳〵忿懥恐懼等のことを引て正心の條目にもとゝ付へ
古人のこゝを殺をつゝ已殺の上にあつて未殺の説あれ〳〵



べし
人のこゝを殺をあ已を起さしむるゐ徳仁義を引て目あ
てゝ〳〵一心を清浄なるこゝ〳〵後世の一心を清浄な
して物欲を掃ふを務ゐこゝを主ゐるて仁義礼智とこゝ
異るの説ゐ〳〵あや固主ゐる先人〳〵ゐるこゝを地
をひ又あ〳〵ことを地をひそ好悪ゐるこゝ〳〵ゐる
あひなさ是〳〵れいあ〳〵れこゝ〳〵多こゝのゐるそ也人聖人の
こゝ〳〵仁義礼智を引て心を地をむるの規矩準繩〳〵て人の乃
古来ふこゝ〳〵ゐる〳〵諸説あるところ〳〵ふを考て知
ゐる〳〵何ぞあれば心〳〵ゐるこゝ後世の説のごゝ〳〵虚霊不昧の
性あるこゝ心の固ふ有ゐて自のゐふゐひをあ〳〵れこゝ

あるまじきなり。常人尚徳の学をなさ
ざるべし。極る所七十の家よい
たりて。たゞ欲不踰矩しるべし。何ぞやきろ
の海ふとろえいかゞのうにたゞしく多さ少き々なし
みるひとく七十の境界よりてくんの海
ふゆゝたるひくもどのづゝのうにてゞくるれてあり。顔子の
三月不違仁もはゞこゝあり。孔子程と
異なるふあるべきこゝ。あまこのこゝ推しるべ
後世儒家の説よりとゝくんの嗜欲好悪指ゝあるは皆人
のたゞにくをんあゝ。常人のこゝ月のたゝあるゞ
ゞこゝ清浄虚明なして一点のくもりもなし。人欲らゆとゝ

ふるうにのうにたゞこゝ多し。山岳晁無咎に賜る詩よ。本
如月利欲食を既しこゝ。乞朱子明明徳の解乃喜子明明鏡
水の説あまをみるうにはこゝ。極まゞゝを上限よ所挙文子のこゝ
ばゝ。考こまゞたるあゝ。又孟子岩子の箱ふ孔子の翰をこれ
いつゝ。操則存舍則亡お入無時莫知其鄉惟心之謂与。これ人心
のこゝゞくゝくをしびるあゝ。あくをれあくるゝ中をれこゝとの
こゝ。つまゝ文真金ゝ大なゝ入てやゝゞ古にゝゞ中をさびゞ。中性ゝ名
ゞるゝんゝゝの後世の説のゞくゝ。貴ゝ真金の不壊るゞゞくゝ
りのゝゞあやうれこゝあるゞゝくゝ。ゝゝゞくゝあゝくをれゞあ
くるゝれゝくたのゝゞゞれをのゝ人ゝ文子をこゝ惟ん
こゝ謂与こゝのこゝゝ中をこゝ。人の不謂んこゝこゝのゝふ和

えの上ふるくのるひとく。虛靈不昧の本体をさとふあるべき
てくもろもろ。

後世ん学ぶさんあるふるんの本体よりおいて入存亡しるしてしるある
ドルとうて義あり。宋の時花徂禹字清夫とうて人あり。程子に師たて
ぐつ門学び。唐鑑とあるうて。ねるれ人あり。そ女子七歳のは
ふ。孟子のひ章とうて。みんよりおいて入るれるものあり。孟子ひんとたう
ばとうて。侯門先生ときとれて。ひ女孟子とたべ。ゆくしいべ。
ものうてくんとたべくいつて。或人ひてしと挙て朱子に問て。これは
侯門のゆうそくうそらべ。朱子の色をいう。此女
必大資る見此ん常湛然安定無おいて。然元人不能皆此。
若通而人論ん却を作底物。孟子所門夫子を言そ也義

人論耳。又陽明の書をんよりおいて入るべ。出入ハ神用の謂なるしい
へつて。諸先生の說と通ゝ見るふ。畢竟もろの本体ものを
入るべうて拭もろ。大抵宋の一代ハ。前代よりも程学さうに
約ろふふるろ。文武百官皆程子とでざろ人るべ。幼少の
女子ハ。ものを廉恪ある生付のものハ皆その訣とん清ゝ
孟子とうこ。世の說ろうべ。孟子ふのもろてを。
ろ人の上ふ。然ゝいひく。後ゝふあゝれてゝるう。独をゝを
りゝうう孟子の語ふをあゝ。孔子の語ふをハうこがべ。さうり
あ侯。そしてうく。古ゝ人の死謂んゝうこの皆已後の上
んよ。然ゝ說とるゝく。虛靈不昧の本体とさとふあゝざろこ
と。ものうべ。

孟子の以前人は善悪の說なし。論語は載る教語を考へ
何をか人の上に於て善と定めて見えず。孟子
ふたつに成て。善と定めて見えず。孟子
と言ふ事のしつかと出来て性善良知良能の說とはじめて
わかれ。自暴自棄のものは先王の法を行ふのみ。是ならず
てこと示したる。性即仁義良知良能也。故に孟子
漢唐の諸儒は孟子性善の說を服せざるゆへ良知
良能の說世に倡へ人多し。宋初より程朱ならば孟子
と崇信せざるべし。性善の說を問ひ初めしは孟子
その人性の說さんなりふ。孟子の所謂人性善とは
しかるべきゆへ孟子とともに人性善と

とゝ言へり
孟子の所謂人性善とは已後の上に於て
辭を論ずるなり。故に云。雖存乎人者豈無仁
義礼智哉。又曰。人皆有不忍人之心。側隱之心仁也
と。又良知良能云。何をか良知良能とは
とひ。ものゝ義理と帝ものゝ
いろ〳〵ものゝ虛靈知覺の本体は仁義の理そなはり
で出来ものとなり。故に先王の人あるは孟子
みを本心とひ。後世諸儒は孟子を本心とあをぎ
ゆへ考へ考へ。とんがあるべし

孟子に求放心といへるあり。是も仁義の良心をうしなひ
はなちて後世にいたるまで此心の苗孔をあらはしてあや
ぶんの辭をもつて放逸と云。放逸とは初附の放心をとりつ
めてのごとく昏昧放逸をもつぱらとすと先儒これを求放心
といへり。何ぞ孟子の意をもつぱら前章にいへる放心を良
心者亦於茶行ゑ放未也又此章の首節に仁人也とこそ
とうあれ。やはり有放心而不知求とこそ放心をいはれた
義の良心とをわかつてまことにたゞ昏昧放逸のところとを別に
あらざるべし。素皇の傷士と坑ゆ。白起ゆ除平とところ

をゆるしてそもそもとかつて放心のうやまはれてをのふれ出もうして
下。不仁不義のことをして何ともうれまつぶるべと放心をうしなひ
もつぱらとして出ようとすれば放心をとりもとめてとこそ放心と求
とつて学問をとうべし抗常にはつるべし
孟子の問学問之道無他求其放心而已矣と出也。而已矣と無他と云
而已矣とつかひかた又別義なれとも出るべし。猶ほ集註の学
問の道固非一端とあり。是は求放心のことを世俗親切のごと
ふ世人ろ西人よりもそのうちに書を讀み理をたつねる許多の
工夫ありそなべ。猶学問の道ありてこそひとつ固非一端とつかへて
猶もそこを孟子の一書に仁義の二字ろ油澤なるものの
あんべ。一の仁義の旨をあつぶるかるべ。猶もべ仁義の良心をうしなひ

ふると求るとしるる事はなくるとあり。書と讀るはと讀求とも
もとのづくりと中に出るとあり。他ものとは異なるとあり
高宏あるとあり。上陸象山の説をとり学んとをして
讀書窮理をとせんとせずと集註は固那一端とあるを
又出るあるとのとあり

先傷求放心のことと裏る上は放るふるとは出るで
うるはは後見はるとあり。朱子の曰人心後覚時
便在孟子放求放心求字早是遅了又曰只因知得放而求
斯不放矣而求之三字亦自剩了只是放心放心
却是一箇事求放心別無出路求放心別無出路求放心
而已云出路とをとむるとあり求るとは

[illegible]とあるとに出よりとあり。若海無邊田複道岸とあるとし。
諸類此求放心。放得極好とあり。先傷のを意出るとあり
あるとは明心見性の說よりもはるかに孟子の意とし天閑のちがひあ
るとは出るとあり。後学とし俗ごろにして固那一端とあるは
とあり。孟子のを意は仁義の良心とをとむるとあり
出るとの孟子の意は。
書經畢命の篇は。雖收放心閑邪存誠とあるとは
とあり。後世の放心の說よりは。孟子は畢命は古文尚書
の内にて。南北朝とあり。後世とあるは後世の偽作とあるとし。先
傷とを窮ひあり。孟子は後世の偽作とあるとし。先
大学は正心とあり。章句は在正心者。既有

所忿懥則不得其正有所恐懼則不
得其正有所憂患則不得其正心不在焉
視而不見聽而不聞食而不知其味
是謂修身

忿懥恐懼憂患皆人所不能無者然一有焉則欲動情勝而
用之所移或不能不失其正矣此章自忿懥恐懼以下四者皆
人心之所有而不能無者然一有焉則欲動情勝而
怒怨憂樂之類皆人心之所有而不能無者然一有焉則欲動情勝而
其正矣故曰心不在焉而視聽食味皆不能
其正焉

心者一身之主宰而能使視聽食味者也
心之為物虛靈不昧以具衆理而應萬事
人心之所有而不能無者然一有焉則欲動情勝而
其正矣故曰心不在焉而視聽食味皆不能
其正焉

鏡の中に一物と見えたるは鏡の外の物の形とうつり
鏡の上に一物と見えたるは鏡の外の物の形とうつり
物と物とを比べ見るに不化されたる鏡の
中に一物と有在とられたるあとうつりたるあとうつり
あとうつりたる物のまことをうつしたるごとくなれば物の
ふ不正にして朱子のいはく好樂の類を合有底とを不可留滯
不消化又曰心不可有一物若怒樂固欲得其正然過後須并
了又曰事有當怒當憂者但過了則休不可常留在心之
類皆是也とこれをいはゞ偏重なるこゝろ
こゝろの朝待ちこゝろ偏重なるこゝろ
付ごとくたゝ人人對治しんをうつるべき他のこゝろ物
にてこゝろの耳ふりてゝるごとくこれ類なり留在こゝろ
ごとくあゝふるものゝ物ごとくこゝろ朝待ちこゝろ
ごとふ先こゝろ待ちこゝろこゝろ
こゝろ正こゝろこゝろのごとくこれのやうにあてこゝろ

定性書に無將迎無内外とあり。將とハ人をおくるをいひて
なりて即留在なり。迎とハ人をむかふるなり。即期待なり。何ごとも
さきの物に執着せざるやうにとの工夫なり。畢竟佛氏のいふ所の
應無所住而生其心の説に落て。聖人とハそのへだて甚遠
らざと

先人大學定本をあらハして曰。發憤忘食。又曰。三月不知肉味。
若以大學律之則是雖聖人。又不免放心。豈可乎哉。又語孟
字義にもかくいひて大學に仁徳をいはざるを存ずる事ハ誤ぜ
ざりしてただに忿懥等の四つのものをのぞいて説かれたる孔孟の血脈
とするが故なり。正心の字ハ孟子にもあらざる正心といふ事あり。
論語にも見えず。只大學の上にあらはるゝ事



あらざるぞ。畢竟仁義の良心を見失ひして剛害なるなく欲すくしてなる
の甚しき類をいふなり。然るに學者或ハ疑ひをいだして或方相無
しれて無欲に害ありとする。是をもて先儒の説をとく
りてくはしく考へず。又聖人の主意を弁ぜざるものなり。今又是を叙
定本字義古義なるに出まして詳にする
或人の云。大學に正心の目を挙て。忿懥恐懼好樂憂患をもる
所なりといへバ。此所も心のこれにまかせよと戒るにあらず。則此四つの
ものハ人心のなくてかなはぬものなれど。ほどをつくすにあらず。この
四つあり。これをただいたずらに發してハ私心となりて發動し。率らざ
れバ即ち著せぬやうにせよとなり。有所の二字に氣を付べし。
とこころあらハ。忿懥する所あれバ恐懼するとその一念のうちに

はらくれをそろくるの字義なり忿懥恐懼をそろくなさ
ずにいくるへ語りあらく雖ども本文の意よあくまで如何有所二
字のごく語類をあらる曰四者只要心無知發出不可生有在
心下須着有所二字又曰有所是役他為主於內心又為他動也
葛寅亮湖南講義既有所者心氣質用事而著於方所
之損也黃大祥宜照解云正以心本体空虛安得有所有
所者不法心之虛妄記念而法既有念而法既有所者偏也
偏記于蔽偏蔽者如何明明德于天下之心皆本文と遷移したるものなり有所とは
多くあり必ずそろくといふあるべし近くさて樂ばよへ論語
皆有不善者也有所試矣孟子人皆有所不忍達之於所

忍仁也人皆有所不為達之於所為義也人皆有所為義也又將大有
為之者必有所不為也人皆有所不忍有所不為也人皆
之場合をそろくさて志のびどせねばくいまくのこるの
必志のびざるこころよ者しせざるよくさるいこふあら
ど本文忿懥恐懼の不あるこを執是有在とそろくと引
あくそろくしそろべし本文の意は忿懥恐懼等の念の
為よそろくと初さをざるやうにそろくべくそろ
或人の云大學に心不在焉視而不見聽而不聞食而不知其
味云々に故心のこれの志食肉の味を不知の事に誠
のこそ者分の事也一聲を論ずべくべし之をそろくべ大學と雜
ずべくべし志をやむこと沒ざるの說あり正心の說よろくべ

いつくしれへ事の善悪とはつゝどたゞ善人の着せざる毒うみとる
こゝろ。猶もべ文子の韶と聞て三月の法味をだに肉の味とおも
はるゝ。留在こゝろのよあゝ嫌や。周公の性欲待且孟子の教而
不寐。朝待よあゝ嫌や。顔子の死とてみて惜とゝ笑ゝ多
ぜろへ偏ゝまりよあゝどや。おもふろくおろ。聖人のどゝ（もを
つゝ事の善悪と聞くおろのおもろゝ着せざるゝとゆて
更用しゝ嫌ゝこゝあれてゝあれてゝ
人人の物よ感どろへ善ゝおのゝしてふろゝて感どゝ色し
れゝゝおんゝふゝゝ。或いは夢よ見て或へ他のとを都を
あるゝろゝおゝのゝゝあゝと易めべくゝゝて一禁よおもを
人の初ゝていゆゝむべゝ嫌ゝゝ善よ文あるゝべいまゝゝゝしゝべゝ

ざろのゝあゝどゝ兵法ゝ保ゆゝりてゝゝ人のゝ歌ゝゝざるゝゝゝゝ
何ぞあれべ人の物よ感どろゝ。ゝ非物正ゝゝ常底の人人の切りしく
ゝ。猶色臭味の上よあゝ。ゆゝよゝ感どろゝ又美色臭味の上よ
在てゝゝゝ嫌楚の裏王の臭に迷て徐安と爰人殷浩が官爵とむさ
ゝりて空函とゝゝろゝゝゝれおゝ。ゝ法ゝ戒ゝゝくゝゝて論ゝろ
ゝゝゝ嫌ゝ人の善ゝとおのむ常人の美文臭味とむゝゝゝゝ
ゝゝ。ゆゝよ善ゝと見て善人よ遇ゝくいゝゝよ信者ゝて美ふ
見人他ゝとゝゝふゝゝゝれゝの周ゝと爰ゝ韶と聞て肉の味と
おゝゝゝれおゝ。霹上聖の法と伝て玄治の味よあゝ。
故ゝゝ楽善ゝゝゝ美ゝゝて他の楽のとゝゝゝゝゝゝゝ。
善人とおゝと聞ゝへ他ゝふ伝ゝふいあゝゝ。彼ゝゝゝゝゝ

人のおもはからざる事なりとしりて、即そのまゝにしておくべし。
夫子ハ斉にましまして、韶を聞給ひ、三月の後
迄も肉の味をもしり給はざりしとなり。是孔子のこゝろざしを
又肉を食へども其味をしらざりしハ、韶を聞の余、いまだ化せずして
味をもしらざりしなり。不在焉とハ心はなれて、今日の学者の
上にあらはれていはゞ、怠惰無頼にして学問をこゝろ
のまゝにするものハ、先生師の前にありても、遠くさまよふのおもひ
あれこれとかまへたる人、書を読ども一字も胸中に入ず
ことなし。或ハ読書する者の心にかけず、書をよむといへども義理をしらず
それをしへども、志あるものハ講習討論をたしなむ。夫文を読ても
学をおもひ、みづから深く学問をたくむものなり。

まことの心をうしなへども、おしむ事をしらずしてや甚し。
見他の事を聞とても心にとめず、正人の説を聞ていましめられても
心を放ちて、かへりみんや。梁の顔之推が兵権の職を作りて
権ふ事を嫁まゐらする風が書をよみて、まことにおもふべし。
浮てし記誦詞章のことをも、学問といふものとおもひて、他
をとおもひて、奇特なることハ古書と正史とを志して、家
の義理を深くし、又邵康節の易を好みて、不寐にしてあることもあり
ことあり。故に聖人のみちとするハ、常に徳をたのむ学をたのむ
ならぬ孫之をもちひて、そのこゝろの至るところをいましめて
なし。周公孔子の心を志すことを、万世学者にかくのごとくあら
くみな志し、善ことのむかふにせよとのこと也。徒らにて

なし。またたゞ此心の物に着せざるといふ事しかれば聖人の心に
あらず。常庸の人にあるべし。又は教へしてそのみちを聖人の
上にあるれば至誠の感しては、あらそふべからずしてまた
先儒又顔子の不遷怒といふて正心の説援とせらる。程子曰。顔子
之怒在物不在己。故不遷。又曰。喜怒在事則理之當喜怒者也。不
在血氣則不遷。若舜之誅四凶也。可怒在彼。己何与焉。如鑑之照
物。妍媸在彼。随物應之而已。何遷之有。朱子曰。事有當怒當憂
者。但過了則休。不可常留在心。顔子未嘗不怒。但不遷耳と諸
類正心の條下にあり。先儒の説乃道なきにあらねば。喜怒哀楽ともに
留在してうつるれはなるべし。如らず。彼をば聖人の顔子を称
しまうすは何ゆへに不遷喜怒と言つべしてたゞ不遷怒と



がらのまうへ也。喜怒ともに人心の用なれどもその内にいかりは逆
徳にして。とくにまされば人を害しそこなふてあれば。ゆへに喜怒をとりて
これの戒めとして。たゞいかりをとりわけて顔子の言なり。志をもれば
喜べしくてもそふくしよむべかざるとしてあるべし。たとへば
人を招きて酒をくまんとして。招かざるの客来りしは。志をもに酒
をすゝむることくらしかるべからず。又一人の手に罪ありて。志をと答せん
にいかるよしなき者を打撃せんは理なし。不遷怒もこの類
にて聖人は意念を本としたまふゆへ。かく称美し給ひ。
後世には心を清明にせずしては。かの喜怒ともにふう
ぞうといふて。先とは更に別と弁し考ふべし
舜之誅四凶。怒在四凶。舜何与焉といへるも。おもしろき事の

うれし。喜べきのにて怒べきのにしかされはあり。喜べきのあるときこそ
喜び。怒べきのあるに至ていかるか人のならひなれど。ちかき所に
あり。先生も哀楽の上にをいては同じ事なり。父母親戚の喪
ありし身のかなしみ。先生といへども。むかしのんはそれを大切
にせらるべき人は。怨哀愁傷して先生をうらむれ人あるを
皆かくのごとし。堯舜亦人耳。聖人とても先生にかはる事なし
孝慈の心あつきゆへに。哀喪の心いたりつけて常の人よりも甚
かなしみ。然し哀傷聖人の心を清浄虚明にして無心なるされど
たつとぶ所なり。ゆへに舜の心には在彼不在己といふ事あり。されば
かゆへに内常人の喜怒しで聖人の喜怒とはかはりて別なる所
のありすると。わかれ。先生を上に論する所になりて。常の底の人ハ



何の間違もなく。家人はさらにそれはいふに及ばず。聖人
をも主とする事なれども。仁義より出る喜怒は。人の善を見ては悦び。
人の不善を見てはいかる。四凶をころされしは悪逆無道にして。天下の
害となりし。天下の人をそこなふべく。仁政をさまたぐるゆへ甚し。
怒るにより。舜のいかりをまねて。常の人よりもはなはだ
しくいかりをしりぞけ、先生を放流して是をゆるさず。大学曰。唯
仁人放流之迸諸四夷。荀子曰。仁者愛人故悪其所以害之者
をいかる。武王の怒を同じやうにて。一人の横行して天下のた
害となるをいきどほりて。先生を誅伐したまふ。故に孟子にも
と文勇にして一たび怒りて天下の民を安ずると。あるに附
の諸侯にまして。王請大之と説る。怒の心にても有せざる事

までにしてしまへり。あるひは怒はさるべきにあたりて己にある事なく
は。尚以説べからず。
仁義の名は人の標準なり。故に生付のよき人なれども其志を有
ふかくしてよくなくとも志をたて種々の志ありて肉の味を考
むざと甚る不究膝と云ふゝるは何を此志ありしなり。故に聖賢の書にはその
やうなることをたつとき事。第一に志あるを逆後世の人をもつて
くにあるもとにして志あらるなり。後世には人々法をまもらずしてるれ
ようやくのことにて人々のやまひとなり。独りに聖賢の書に此
やうなることも多なるは。先儒の會意には聖人は名別のことく學
のみにあらずかんのやまひそうしていはむのことくにもむらにあらず
皆老佛虚無空寂のとくへうら出るところのことく。聖人のなき



其求心のちがひあり。佛氏は仁義礼樂をなくしほろぼしてたゞ
自己一心を清淨にならんとするゆへに悪念のなきのみか
善なるはいふにおよばず善念もなくせんとして淨なるべしといへど
も。そのかみ白樂天惟寬禪師に問ていはく。垢即不可念淨無念可乎
とありしに惟寬作偈答て云如人眼睛上一物不可住金屑雖珍寶
在眼亦為病としるせり。このたぐひの説多し。儒家にも曰
不係心の説あり。何事をも心にとどめずしてたゞ此のごとく。善悪ともにつゝ
まざるを一物としてむねにとどめずしてよかるべしとなり。先儒の説おほく是に同じ
を畢竟此説にかゝる。須察べし
先儒の論ぜらるゝ心は常に虚靈不昧と云。明鏡止水のごとし
とらへは此し大學定章諸孟字義に先達て論じてかくへらく。

是皆佛光の說なり如く望人の書ふに本なりの此語のあく示この
名種を分ちて人つ心ばてしに前よりまこの條下ふて辯よ福どる
てしあるもびなるよ色用して又人べ〜ひあて糸ふ地よづど。
虛妄不昧なりてしいそで光てく大字章白にお明鏡止水の
てしい指子の說よりて光てく見名。聖人名如明鏡如止水〜〜
類多くあり。出もなり以あの名者又は賢のてしべふいをし
なりあくのでれてしあり。虛妄不昧の四字は佛書よりづ又は靈々
不昧なる々常知あるしふの類。多く禪佛の書よあなり。明鏡止水
のてしは莊子よ連用してはみえざもと續よなりて止水よりふ
もてし。あるふんえなり。佛秀の偈よりく。既是菩提樹。如明鏡
臺時。勿拂拭。莫遠染埃。と。佛書よんと續よたなりて

あまてあり。異よあくふいて色あり。何をを佛氏のてしいと清
淨無欲よりと知ると知ると。人のてしふ知ると知ると
てしのを意ちひなりふりてしば知るあなりをもて又あのてし
し。聖人のてしは人倫日用と重して仁と義と禮と智と
ふいとしてよは人皆有不忍人之心。先王有不忍人之政。斯有不忍
人之政矣。惻隱之心仁之端也。羞惡之心義之端也。辭讓之心禮之端也。是非之心智之端也。
たとへとなりを流水よたる人前藥よたる人火の始燎よる
なり。次第ふ生長しまして人の始極よる。虛妄
不昧と知るくんの正体をもてしは明鏡止水よりて虛妄
なりなりをもてしあり。何でおもでなりて人と
なりなりをもてしあり。生物は生物よりて異物と
なりなりたるべきは活物なり。明鏡止水は物なりて決の妙用

あらしめバ無情なくうちおくしてなれどものなきハ佛氏のいふと
たるべし。聖人仁義のおしへをたてゝ人道を詳にせしハ字
義童子問にあらはれて詳に論ぜらる。
又人心道心といふことあり。書經の大禹謨の篇に出たり。
舜禹授受の時の言にして、人心惟危、道心惟微、惟精
惟一、允執厥中とあり。先儒傳真西山をはじめとして此十六字は萬世
聖學の根本淵源也として、朱子中庸章句の序に詳に
いへり。人心といふハ人の絶とこゝろ合と耳なるの心にて義理をもて
辯。形氣といふハ人心の屈曳の類とかいふ事。道心ハ人のかならず
いふものハ性命よりつけ其上にめでたく知覺するとも何ぞや
道心ハ人欲ハ心よりなるとて、悪ともならず、義理の心ハ人のよるとも



ゆへ道心の念ひはちるといへば放なれば人心惟危、道心惟微とて
あまねくとしてこれさしおくてれば人欲さかんになりて天理もほろぶ
よりて人心道心のまじはりをまもるべきを肝要とする
なりにし、正しく是をよくまもりて純一なるべきを守らんとする
これをば人心を道心にしたがはしむるなりと初學言行の上
にも過不及の差あらし。故曰惟精惟一、允執厥中とあつて、堯の舜
にさづけ給へるは允執厥中の一句なり。禹の舜
のいまだ及ばざる所まで三句を加へていはれたり。人心惟危以下の三句
とのいふなり。しかれども詳細ハ章句の序並に書經の蔡傳にゆづる
考ふべし。ただし古来言傳ふるごとく、書經にはのちにつけくはへ、
堯の舜に授けしに允執其中とのみありて書經にハ見えざるとも。

論語堯曰の篇にすこしばかりあるも但しに宗信をぞくしてなり。
論語にハそれも舜に舜亦以命禹としるしてありて詳の事細ならし。
今の書経にのせたるハ十六言によりて彼一言を紛らかし
又其の大切なることなれバ論語にもそのまゝにのせべし
しかるに成湯武王のことをさへくわしくあげたる中に民食喪祭をも
のせたれバ危微精一のことばかりにたくらべてもかくれてなるべきをバ
あげざるにつゝの十六言のことをもれてなし。然れバ古への書経
にハ此十六言なきことあるべし。後世の附会にいでたるなり
書経ハ今文古文の差別あり。今文といふハ秦の時乃博士に伏
勝といふものありて書経を全く記憶せり。漢の世になりて
景帝のとき大常掌故晁錯といふものをつかハして傳授

せしむ。二十九篇あり。然るに当代の文字なるによりて今文といふ。習ふ
又古文尚書といふハ、今の堯典益稷なとの篇をもならべその
後武帝の時に魯共王といふ親王ありて、宮室を作らんとて
孔子の旧宅をこぼちけるに、其壁の中より古文竹簡の書
いでたり。書経あり。それハ秦の焼書の時、詩書を埋蔵して孔子
の子孫古書のなくなることを歎きて、壁に納めてかくされたるなるべし。その
うちの古文字科斗の文にてかかれたるを、今文の書と古文尚書と
くらべあはして武帝の子孔安国のときに付して傳あり。然して世上
擾乱して学問の沙汰にもおよばず。古文尚書とをとりあつかふものも
なし。其書とて其の書もとりおきて経となれども、後四五百年
を経て、晋の初めの時なり古文尚書といふものを補せ、経となして唐

の〻れよ註疏と作る。古文今文と合て五十八篇あり。今の禁傳とこゝ多あり。その〻孔壁より出る古文は後〻に上代の書なるべし。然もこゝに後の世よりそひて傳あり。後ふるゝ古文〻〻は孔壁の書より多くこゝに書あり。大禹謨五篇に欽若の篇をこゝあり。皆偽書なり。呉陸門明の國子学正梅鷟帰震川郝京山の説よりは何もこゝに古文の説〻〻こゝとなり。大禹謨の一篇と古文尚書の内なる危微精一の〻〻は舜禹授受の辞〻〻にて信用すべし。後漢より後四百年の間。後漢の鄭玄孔紀の註。三國韋昭が國語の解。晉杜預左傳の註あり。古文書より〻〻辞と引る書は何もこゝに逸書〻註〻て篇とあるべし。その〻〻後漢魏晉の世よりそひて古文尚書〻〻この世間より初て見えたり。後年教てこゝ

過て

あるべし。

載る

大禹謨の一篇より載て〻〻〻〻〻〻。三苗征伐のこゝの事〻〻は。堯典益稷及び呂刑より載て〻〻〻〻〻〻。何もこゝに舜摂政の〻〻より事をこゝに〻〻〻〻。堯の代にこゝあり。後に大禹謨小人舜の世よりこゝに又禹の征伐〻〻〻〻〻〻。他の篇より載る〻〻〻〻。待合せ考べし。傷さめ〻〻。分疏あり〻〻〻〻。何もこゝあり〻〻〻〻。又三苗とあり。曰若の在野小人在位〻〻出もこゝ。後べし。若の在野小人在位〻〻は夏の桀南の討をこゝとせそれ〻〻相違あり〻〻。三苗の國は人面獸心の國なり。若の小人の是分をあくぷうんや舜の〻〻にて在れ〻〻と

名北〳〵そむくを也とそむくふせぐ〳〵あるへしむづさの表長
をあるまぐれて〳〵あるつ又讐示元若玄誠感祚紹羌有苗〳〵
つて〳〵あるつ出もとん淳づて〳〵。讐叟〳〵へ現在舜の父あり。
古人へ質非ふ〳〵れて物で〳〵ふ遠慮ものと〳〵あり〳〵しへ〳〵と禹
の舜乃命とうもて〳〵伝伐〳〵るつて讐叟と三苗よたへれ。
紹羌有苗〳〵つて〳〵へあるまぐれて〳〵あるつそもあれへ讐叟へ三
苗ともあり〳〵れ〳〵ゆる。禹の対鯀の〳〵ともへ遠慮〳〵れ〳〵いつど
〳〵。註者為親者諱也〳〵へつと。後もび讐叟のつとして三苗
ふたつつへ附會の〳〵ばれて。孟子ふ載る逸書と取あるもて。
伝〳〵ひつるもの〳〵えへつる。此等の〳〵へ何もとへんるん
の〳〵ふあづかり〳〵ざる〳〵あもづと何もと附もの〳〵たへふ



舜

出もとつる上へへんるへの説を同じれ例あれ後世つる取あるも
つる〳〵ばにして。舜禹の事諸よあづかる〳〵とあつるへんる
つるもと諸〳〵ばつふすつる
先人諸友〳〵會〳〵れて荀子の書と讀れ。解蔽篇と乃経
曰人へんつる危乃へんつる微危微つる幾惟明若子而後能知之玄
〳〵と見あるつる今の古文尚書の〳〵ばへ伝ふつる取きれつて。
舜の〳〵ばふ取合もるあるべ〳〵へつる荀子の事文この前
小舜のるあつる又精一の説ふ〳〵と見へつる。あつるつて。
古文と偽撰もるもの元執厥中〳〵つて〳〵ばつる附會もる〳〵
見へつる荀子の註よ今虞書有此語而云乃経蓋有乃〳〵へ経
也〳〵然もと荀子の註へ唐の大理評事楊倞作あもへ

今の書を見んて後世よりさまくとかへまく事より説授しめるに
ふられ詳なるてしハ中庸発揮の蹈頌にあらされ事亦大
禹謨をとおもへしれふそへとまで
人ぐるんかいへて今日人の上に就てりんるに随てまかへの
でくありてしまかの絃もつらい上代の風気ハをとりてを殺し
民を非とらの上にれくいしんへとられくらぐん性質の微妙なる
てしハ見ん名き舜禹授受のことまからのをまんれハあきまし
くやいんや論語孟子をよりれくみえるに従心所欲不踰矩しきと
いんへんかに似たる存乎人者豈無仁義之心哉をしたへるんかにとに似たく
ては絃もじくとも孟子に仁義をくんしてへいさぐに人への上に然て
見んるるとみれくんんとて成まれ仁義のんるてそのあらに



あく欲そもゆへに仁人の色しあらしふんかいんくにに所立
こありてへてまよろへてやうに上先儒の説乃でく放気のこ
たちしれまるとんへとくひ性命の正よりへくとえんしてたくを
ふられく出る也とりかうしても殺ひぞんに犬もも天地の間に並生るか
そも性あられふらてまかし物へそれへとて飢飽寒暖の好んへ牝牡利害の念へ。
人し物しあるをしかし物へそけあうにあらんくさいれくとり
ねまん義理を志ることなしんへのひまる肉まを邪と辨まよ
義理を志るこしあるこまを食にてしへ人まめ穀ハわしよる食ふ
為し糠穀も亦食とへし糠穀へ食と為しるともくへも人をもし
あへの方ふし穀へ食へ為くして偽くらくんと異へ人んをも
まく主への気にて万物の果もしれ天地の性人をとるし

ともかくゆるんなる私もべからんしてこそのは人心の中にあるとし
みてけれしてはなはだおこるすべし愚又拙とよびくはんなしてはこ
食色のんなるかにんもつなは義理のんなる私もじとも食色のん
は禽獣虫魚のんなるをのにおろべてなしかくしてはこれを
の頭圓く足方に万物の中にひとりすぐれなしとして天地と並
立て三才となる私なるにされたて人なるものでなくところ
禽獣虫魚にしておなる欲をしてずか行ひは不道の者とならんと
てなどしめて義理のんなるなきもの也。人なるは肉はよくに見なる
てしまべし。夫子曰人能弘道。非道弘人と。程子も又ふべしと人を
無道外無人ともいふもの人の立色にや。夫子又曰人
のな生也直し。孟子又曰人性の善なる也猶水の就下也。修まれ
人心と欲気にかはるつくしては愚なる也。畢竟人の性と気に招
様にふみくるを天文を考へ地理を示し上下百家のむかしとある。
後千百年のむかしを推し。億万の人上一人とこれが親しをはく
つまるとそれは千万里の遠さところのでこともとあるて絶
も人なるものにされども。人性の是非あるなんば私なるんや。性の善悪
識よ論ずるに拙なるも私をば人心道心の名目すらもとなるし
くくてなし

人心道心の外に又天理人欲とふべしある。朱子の説は中庸の
序にあるして見へなきば人心道心の二つは上智下愚もとにある
ものになし。此意を知るべしともいふべしある天理の本然
なるに人欲の私に動くとし。畢竟人心あるべき物なり。人欲は

あるべからざるものあるべしこれすなはち程子の說又善惡をしてあり。
遺書に云人心私欲也なり正心也又云人心惟危人欲也道心惟
微天理也なり人心とは天理人欲こもごもに出るなり陽
明の程子の說とは人心を正者即人心道心
なり人心を正者即人心道心なり程子語若分析而意亦淺
なり。傳習錄に詳あり。王子の合てとおのおのもとづくところを
の說とは也なり人心を正者即人心道心
てあるべし。討論は也なり討論はあるべきもの
異同とあるべきものなり
天理人欲なりて後世宋朝以來とあるべき惡の四人名なりて。
聖人のことと說たるは盡天理而無一毫人欲なり私

性也感物而動性之欲也感物而動性之欲也
欲者也陰象山云と邪說にして也とあり。天理人欲を言ふ
自不云云論若天云理人云欲則云天人不可矣此甚不蓋
於老子。樂記曰人生而靜天之性也感於物而動性之欲也物
至知知而後好惡形焉不能反躬天理滅矣天理人欲之言蓋
出於此樂記云言亦根於老氏しかれども意は禮記の意なれば天
人とあるべきなり。人心とは惡なるべきなり人のなるべし。
云說陸象山云云なるべし。程子云禮記の幸文と熟讀と
なる滅天理而窮人欲者也人欲者也
人欲とは人のことなり云云なるべしなるべし。

初ねまるまでに。天理を存するこれあり。これ有り。然るを
てを人欲といふてこれ。礼記に出るこゝを。後世のごとく
人欲とこゝろのと悪のくへ名とゆるふあるべいうんや。孟子ふと。
寡欲とこゝろあり。無欲とこゝろ。然るを後世一毫
人欲のにくくあるこゝろいあてこゝろ。もろく
或人の云。孟子ふ寡欲とこゝろ。人心のあるべき欲とこゝろを節る
しるべきこゝろにもろこゝろ。人欲のにくくこゝろ。こゝろ。
のあるべきこゝろ悪とおもいるこゝろをあるべきこゝろのあり。
故に先儒無欲を辞の故あり。何ぞ一辞に論ずるべからんや。人心
人欲のこゝろ。前に詳に論ずるごとくあり。無欲寡欲のこゝろ。その
意ふいかにこゝろ。先儒の本意と易るはい



たまあるべき。無欲を辞しこゝろ。論語の本旨ふとあるべく
あるべきこゝろ。宋学の旨乃ごとく精しくこれふあるべき中庸濂溪
の太極圖說。並に養心亭記こゝを。又ふ張子の記の文へ張子の記
云人の言と書にくこゝろ名付けるこゝろ。周子為こゝろ。說性理大全ふとこゝ
とのこゝろ。又ふ孟子曰。養心莫善於寡欲。こゝを為人也寡欲。
雖有不存焉者寡矣。予謂書に不止於寡而存ふ。蓋寡要
以至於無。則誠立明通。朱子大極圖解に用こゝを。發
則欲寡而理明。寡こゝ又寡以至於無。則辯虛動直而聖可学矣
こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。周子朱子のいるこゝろ無欲こゝ。
孟子の寡欲こゝとあるこゝろ。無欲こゝ。
こゝ又孟子のいるこゝろ寡欲こゝとあるこゝ。無欲こゝ。

無きと寡なきとしいふにしもあまりにくはしすぎなり。それをおしつめて
ことをいはずしてもくるしからず。しかし荘子に所謂悪を近づくる刑
なしの説に似たれば。聖賢の旨にあはず。孟子の意は決してそれ
ただあるべきことを、ひたすら欲といふは、人の本情にあらず。さてなき
ものは礼義を以てのりとして、ふせぐべきことなり。これは
もくするなれば、それをくだされて聖賢の常則とする事世に推
し弊あるべきなり。然るにこれを無とせんとするは
こは何ごとのうしてなりけるにや。後世の人は人欲を去らばの
ゆ疏あるものとも。畢竟見る所あやまりとなれるなり。須く辨ずべ
ぞかし

人欲を悪しむるは、いかにしても、人の形気の情にしたがふに出



て人の命をもかくしてもある。ほしいまゝに欲ふかくして
声色臭味居処衣服器具の安楽なることを願ふ類は
みな欲なり。淫欲はいふまでもなし。故に食と色との二つの念を欲
の第一とす。故に食色性也といへり。然れども夫婦居室朝夕
に食することは人の常なり。然ればみなこれを食と欲
との古ひを一端の形気のうへにしたがふといふなり
なれば説授は異端のことにて、妻子をもたず蔬菜一合
らく食色の念を去ん。儒者はこれを第一のことなり。然
れば是を形気の情にしたがふといふもむべなりや。
聖人のみちはかくて教を立て人をさまざまにおしへぬ。故
に率性の謂なりと。然れども人の性なるをふかく。皇

明剛柔或曰或不及聖人之生也必有剛柔
てのゝゝて出ふぶぶぶ

ぐどんべのぐぐ〜ぐぐ頻又仁の條下ふ論どろ〜ひ者〜あ〜也ろ
ろ〜
大抵ん〜ろ〜ものいろ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜
ろ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜
ぬ

もゝ〻もゝ〻れよりてゝそあつひやうあゝ〻もゝべ居宅そや
きわらぼゝ〻人物を焼ころゝ〻そ害又物びゝゝ〻そ也故常々
ゝゝふ火燭ふんゝゝて突とき薪を徙ゝ〻そ打こうゝ
てみぢらあゝぐらあうにてもろが火ゝと怪むのはあり盃ゝ
んゝゝ良んゝゝ火ゝゝ也平ゝ大者ゝゝゝの類ハ火の切用ゝ
祈ゝゝてゝゝゝもゝゝ物とてゝゝ次の徳あゝゝとあゝゝあり。
孔子操存用捨とのゝゝゝハ火の用ゝとゝてはゝゝむゝゝとの
たまへゝゝ。法世ゝゝゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ物欲ゝ物ハゝゝゝゝと
いゝゝ。然ゝ空ゝゝんゝゝの類ハ焼ゝ之害と物ゝゝゝゝゝゝ灰
中にゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ皆佛氏のゝゝゝゝゝゝ人倫といゝゝ
ゝゝゝゝ。山林ゝ居ゝゝ。たゝゝゝんの孤明ゝゝゝゝゝゝゝゝ



ゝゝゝゝ滑ゝゝゝの見解あり。ゝ人のゝゝハ水火の違あり。
ゝ說傷中小伤ゝゝゝゝ手ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

訓幼字義巻之六終



## 性　凡三十三則

性とは人の生れ付のことなり。董仲舒が性者生之質也とこたへたるは賢書中よりいまだ性皆人の生付とはいへども孟子のいはゆる性相近也。孟子のいはゆる性善。何をもてその要とするか。宋朱子の説は性は本然氣質の二つとなるべし。聖人の意はあらず。本然氣質の性とはいかなることぞ。撰渠法子はいはく撰渠法子の正蒙云。形而後有氣質之性。善反之則天地之性存焉。故氣質之性者吾有不性者焉。此説近思録第二巻よりも。朱子はよりて本然氣質の名あり。本然の性とは人と具ふ

る理をもたるは在りて命ずるに人に在りては性ずるに物に在りては
理ずるに皆一太極の理なり性は在りては仁義禮智
として用ては見聞よりさきにてさりのよあるべずに人のかくのごとく生
存してはるるとけとして荒蕪の大空ところ元来元婦のところ
あるものまりて元有生者ことをはずしてなくまた
のちびもなることあるべたに天上の月は一つすして家の
海はうつるごとし空人のるるよりもあるべ元人のるるよ
はるるふるあるべ只一極の理なり程子曰性即理也理
則荒蕪を於塗人人皆有之朱子曰性者人生所稟受天理也
しるあるべ氣質の性しるべ人の生ずるはるべとあるべ智愚
はるるものあるべ愚なるものあるべ剛強なるものあるべ柔弱なる

ものあるべ和順なるものあるべまこしふるるる

のくらくと掛つて。本体の明を蔽つゞ〳〵。右欲の濁り
汚のみのこゝろへとまつて。〳〵もゝ中〳〵もろ月の新いくもゝ〳〵し。
こゝ人佛性と旅じゝろ欲あり。本然の性よりもく又去
るつ復るの日。才悪於氣。氣有清濁。悪ふ清者為賢。悪ふ濁
者為愚。悪ふ而知ふ則氣無清濁。皆可ふ於善。而復性ふ也。
こゝ氣悪ふ然ゝいるつ。朱子曰。渾然善。未嘗有悪。人
與氣稟。初無少異。但凡人汨於私欲而失ふ。克舜則無私欲
ふ蔽而純ふ性耳。こゝ物欲の蔽をさるゝとゝつ。又
文學章句明明德と解して云。但為氣稟所拘。人欲所蔽。
則有時而昏。學者當因ふ所發而遂明ふ以復ふ其地
しこれ氣稟物欲と為ゝいつ。然ゝもこれ皆佛老の



旅ふ出ふ。ふ人の旨ふ。
宋胡諸傷の學術の為ふ。人ふ及ざるの望。人ふ及ざるの
人欲のおもゝもの。これをゝ人のぞくはい。人の地位ふ
ゝろよいゝべし。強ふ賢の人をゝゆるい。平生ふ
無欲ふ稱為の二字と奉て。話頭ゝして人ふ示ゝす。
ものぞ。ものづゝおもまつ。者ふ人ゝいたのづゝ忠。
父ふ事つゝいたのづゝ孝。人ふ交つゝいたのづゝ忠信。
兄弟ふ交つゝいたのづゝ弟。初容周旋ふのづゝ則
よ。何の礙ふもあゝゝとなる。強ふ詩書六經ふ本
指ふのゝ人。あゝ。孝ふ忠信。義ふ仁義。智ふ說ふ。
書ふ讀ふ。ふ人ふ。ふ人ふ。ふ人

いくばくかを拾ひ集めむとて、内を照らしてみるとなり。
簡易の捷径を示さんとして、毎篇の首章にふたつづつや。
大抵聖人の人をおしへゆるやかなる事を示し
給へる人心は葛と藟と共に水と絡まるごとく、父母兄弟の
恩あり。若し父母兄弟に忠あらざれば、その人と
ともに相共にすべからず。蓼莪の詩、孝子の心を
ざるべからざるの意、自ら生じ来る。人欲を除き去り、自然聖人の
世界に入る。性を養ふべきの道、ここにあらはれ、君子の人のおのづから
ものを求めるの方、聖人人を教ふるの方、あらまほしき
いまし人性の説、ここに書経湯誥篇より惟皇上帝降衷
于下民若有恒性、詩経大雅烝民篇より天降烝民有物
有則民之秉彝好是懿徳、ここに等の詩性の説のたぐひ。
内書経の文、古文尚書の内なれば成湯の本誥も定
かならず。後編語録の文子性とのたまふ。性相近也習相
遠也の一語あるのみ。此語のみ言と考ふる。後世の性の説し
い名分相違あり。ここに人あるとなし教と云ふ
ふぜんのたまふ。性とは人ばかりの人にたぐひ。
大抵世間の人をして、科簡なるものとなるべくの
性を付与し、聖人は聖人の性を付あり、凡人は凡人の性人
の性を付あり。あらくは性を付ふるものは何ぞ云へてもらく

あるべからず生まれながらのものにして
こゝろのうちにおもひくのごとく教へ畢竟益のな
みなく人のうへあらはれたる生付なり然れども人として
生まれながらむこゝろあるべき人の賢人たるべきこと皆
の切なるこゝろなるべし性相習相遠也
教とまこゝろ性とまこゝろ
性相近也しかれども近きに不遠と謂へり今の人のこゝろ
こゝろ式に似たるこゝろこゝろ大きなるあり人
のまた付へ易きあるあるべきこと大きに似たるこゝろ
大なる相違ところのなり唯平生のうへ
より相違ところのあるべき人にあらざるを
のうへにこゝろ世間の人又生れ付のうへ
にこゝろあるべし上智の人に何れも悪人の中にも
をあるべきあるべき下愚の人に何れも善人にもまこゝろ
にこゝろあるべし然れども人の中に
一人二人あるべきこと人にあるべきこの中に
こゝろ皆あるべきこゝろ
こゝろにあるべし皆
皆世間の人の上に然れども
こゝろにこゝろ
後世の学こゝろ性とこゝろ
こゝろ後の世の説の道理

理なり。聖人のるるはまことにあくまで愚人のるるはまことにあくまで。
愚人のるるはまことにあくまで。強ゐられずして何ぞやとなり。性は一なり。いづくにか相近
也。しかるにまことにあくまでと相遠也。近也。性は一なり。いづくにか相遠
賢不肖相遠あるゆゑんをいふ。氣質の性は智愚
と行ふ。むつかしの人の愚一のるるるは喜怒哀樂の性は智愚
質の上にいふ。氣質の性は智愚
也。しかるに此の章は性の性をいふ。氣質をまじへ合はせのまま
いふ。強ゐられずして聖人の性とのまま
性とあげ。これを愚人のまま
程子の曰はく。理也。強ゐられずして天下古今の人は一箇の性なり
つまるところ愚人のまま

強ゐられず。惟上智と下愚不移とのまま。何ぞや。程子の曰はく。下愚
有二要。自暴也。自棄也。強ゐられず天下自棄自暴者。那必皆昏愚
也。徒強而才力有過人者。高幸也。聖人以下自絶
於君。謂之下愚。強考之。停則誠愚也。人の性は善なれば
うつるべき理なきまでも自暴自棄してうつるべきまでも
つまるところ。畢竟愚人なれば。喜怒哀樂の
愚人。故にこそ停下愚也。說文。陽明曰。下愚不移。那不
移也。不肯移也。意也。移らざるは理なきなり。
自ら移らざるなりとて下愚とのまま。又生まるるの人を德備の
說。此章は上章と一章なり。陽貨篇說。
のまま。

れるもの。左傳漢書等の註よいもの。白虎通
ばかりの刻どもあるもの。寒暄の接接をあるべし。一向無智蒙昧なる。
とうしてもを得せざるものとして。悪人にしてしかるけち
びくもの。桀紂陽虎ごとくなるものは。まつたくべきものを
ごとく。黠智ある悪人なるべし。大抵聖人のと
しへ。そなたの世間人物のよる所。一箇
無眛なるものは。何れもとくもうくもうごとくして下愚
不移しのこまかりく。何の能ひもなきこと。浅世相乱の説
らうへ。ぬつるもの無眛なるも。堯舜一体の理と異なる
ものへ移るべからざるの理なり。少しもまぐれの分疏なし。
徳ある賢の所謂性しへ。なるべき氣質の上より能く大聖より説

て。理とさしく性とをとるあるべきなり。
孔子の性とのこまかく諸説あるべし。上のあるべき一章
の易の説卦より。窮理尽性以至於命。とあり。又繼之者善也。
成之者性也。とあり。易の十翼孔子の作なるべし。馬選仲来
言初。とあるもの。此諸孔子のこと。中庸より文
章性道。とあり。孟子。性善。とあり。孟子。何をを人の生れ付きを
て性とあり。理とさしくいつよあるべし。
繼善成性の。程子以来。説まちくまちくあれども
未だ。程子の説より。人生而靜以上不容説。才説性時便已
不是性。凡人説性只是説繼之者善也。孟子言性善是
也。仁義礼智性の本体。孝弟の心。言諸。とあるべし。

善と名付るハ天二義のごとく易孟子と五行の說よりあ
ゝ[illegible]ハ人の性の上ゆくの[illegible]あり[illegible]
ふ[illegible]ハ未發已發の間より說て二層より分て陰陽の象
と[illegible]未發[illegible]已發より[illegible]と繼る者善と云[illegible]
さ[illegible]已發より[illegible]と成る者性と云[illegible]五行初靜の上
より說[illegible]こと[illegible]と說[illegible]たゝ[illegible]磨礱の米穀と磨[illegible]
磨中より[illegible]米穀より盤中へ落[illegible]已發より磨中より
出て[illegible]ゆくごとく繼善と[illegible]
[illegible]と成性と[illegible]委しくハ通書の註より和溪陳
淳の說より孟子のいう所性善ハ[illegible]と云
[illegible]出て[illegible]その中易の語ハ爻より造化源頭の[illegible]より說て[illegible]

なりとく孟子易の語とうつてく人分上より說て說とハ[illegible]
[illegible]孟子の說易より出[illegible]
ハ人の性[illegible]造化上より說て[illegible]
上のようなこと
[illegible]
[illegible]
[illegible]

然らざる人の性の善なる面へよりて他のうとたとへば仁者の
德とかくとしるべし高ありて次に次に
者則ち謂ふ加百姓日用而不知云云ぞ上の句と兼て
ひとしく善しとしるべし仁者は元と仁云云者は元と智云云百
姓は善しと云へとも象時あり四人よりそれらしるべと
とかくとしるべし本造化流行のものにはあらざるべし
存在の日此章のよりけいくるしく作べきも易の本旨必有覺
者のみ既易の次系伍考究して
又と述るとしるべし古今學者の内よりこれと詳
孟子以前性は善悪の說あり孟子
善しとしるべし宋朝以來元と本然の性としるべし孟子の意はあら



ざる孟子のいはゆる性善とは本氣質の上なれば善と見
て西銘の人良能良能と說とはいはざるなり本然の性は
あらざる大抵孔子のときは周室衰微ときの世
風尚存して人人仁と行ふと知ふ志あり
平生人よりゆたかに仁を信ず仁を好と云ふ
きと人拳ぐと云へたまひ人性の說甚まれなり孟子
のときはふかくすすめ世上本とよりくつ壞れ及
で人人仁義と行ふ者のみあるべし自暴自棄の域に
れば自己一所と思ふ者よりもむしろ
孟子これとをとめんるべし人人の性は善なるものとして
しひろめんとをもとめ仁をもとめ人人に故に

人く有者於己者帯思耳とそを四人斉宣王若寡人者
可以保民乎とく自成湯ゆ
胡亥ごとく羊易牛のごと拳て公羊易牛
王矣とのくまつ王者王霸ともに仁を以良ふるとく
つくく、そうけ最分明ありて仁義礼智の理性のたぐめよ全し
とくるあるべ
先儒の説よりとらく本然の性と一理なり氣質の性と揚
ありて古今性とて人皆ゆ揚子韓退之のごとく何も皆
氣質の上より物てんぐしうるもの或は悪と説さ或は
善悪混とく説を或はこ不ありと説て一定の説なし。
孟子はとくとく本然の上より物てまつるばら

て孟子性の説決定とそ孟子と又たぐ理だろうこと
説て氣質の上指くあること説まつぐろふろて荀揚
韓子の説おろて後世の人まつぐも結てく多しと朱子
曰孟子説性善但説得本原処下面亦不曾説得氣質
性所以亦費分疏小溪陳氏曰孟子乃性善元当統大本
上説亦不曾殺出氣稟一段所以啓後世紛々之論と元分
つ性善とと孟子のいう性善とつものもそまく氣質の
上より物て善とはとるものあて理より物てるあるべ
るべそ理ゆ物てるあるべ
先儒の説よりとらく荀子云都子の後ぐ氣と説て性と
しく理とそつぐとく孟子云故子告子云故子告子云の説と挙

て孟子の性善の說と終つて孟子の性善より論ずいつの時
性は皆氣質の性なり性の本はあらず善いつの時善は本
然の理とそなはつて端的と一句と說破せられたる善と
故子と平仮しく第世学者をもつて論ずるべし強ふるものはあるべし
かるべし強ふるものはあるべしして先ずは水を無分別
大なる性牛なる性牛なる性犬なる性人なる性與なるのごとし
光竟のごとく及ぶべし強きべし孟子のいつの時性善云故子
のいつの時皆氣質の上なり然るに善不善と弁じられた
るものなり理氣の差別はあるべしと又のごとし
孟子曰人性之善也犬之性猶水也然水之性猶也孟子



性善と說氣質を然るに人なる性善と云明白なり何ぞ
きは水とするものは流出る上なるとて上へ流れ下へ流るるの差別
をあるべし水は流るるとひとしく強ふるものは上へ流るるとを
流るるとひとしく強ふるものは下へ流るるとを
らるる上は孟子の性善とするに氣質の上已後の法ふよ
つて人なるべし
水と流れる性はたとへばめぐり孟子はあるべし宋朝の
先儒はたとへば人なるべし内なる人の
同じくして孟子は上下の上なり然るに人法世は濁る清
流なり然るに人も性の又人なるべしよたる人の取
を角と相違なるべし孟子は人と法揚と見善とをもむ

てこと。決まる。成もとと。くんてまつまるうて。あのあづれて下
よ。然と。以て。人の性の善なるたと。四海よ。あると。以て。仁の扶助
こと。七篇のうち一句を。清酒よ。然て。たくさんこと。あり。後
世の諸儒。性の善と。扶と。人欲の蔽と。水の濁のごとく。ふ
おのくるあり。とのづから。清酒よ。然て。たくさんこと。ある。性。扶と。全
ふ。性とあるふたつ。就二十三條。あつづづく。清酒の上よ
然て。就とあり。て。上下のたくあり。根本異。まつまつて。とあ
ばづつあるのごとく。相きとこと。あり。明の羅整庵困知記よ。此
善分。仕まつ。又こと。あり。孟子の性の說。孟子の
意よ。あづこと。看破せづ。ふつて。二說と。合て。性の說
ちづめて。使こと。あり。それ。朝侍郎の說。あり。あ方と。あつ

ひこと。あり。雜分。あこと。あり。
孟子又。善。あこと。あり。孟子。性。牛。性。牛。性。扶。
人。性。與。と。あり。孟子。あい。白。性。善。氣。傳。然て。いて
こと。決。使。第一の明說。あり。善。ハ。人の生付と。性と。
と。白羽。白玉。白雪の白。皆異。こと。あり。こと。いつ。凡生。
る物。ハ。ふ。性。あ。を。そ。ふ。善分。あり。一擊。いて
を。ぐ。こと。ち。ど。孟子。そ。とこ。ん。ぐ。ふ。ふ。性。ハ。牛
の性。ごと。牛。性。人の性。ごと。何。ちづこと。いあこと
と。あつ。ハ。扶。あこと。あり。あり。善。
何。ぐ。執。あり。と。だ。牛。人。性。一。たづ。あり。と。ハ
いと。ど。ふ。あり。て。孟子。人の性と。善。と。あり。自

強よりもろべ〳〵なの性はうまごとく牛の性はうまごとく人の性はあくのごとく元亨とうさまく善悪と分ちたるもとむるさはみな氣質の美はあり強ゝべ氣質の中ゆゑ只人の性のみ善あるとはいふなり善とはいはゆる天地の性人ゐる貴〳〵をあらはすのごとく解とまべ孟子の意明白端的ゆゑとうとくあり強ゝべ先傷性善と本然の理とをもてよりつゝ此章の同若干章竟不完の語よりつゝ人物の性の惑とひとく端〳〵あり先傷の說よりとうとくさはみな物の生理一分殊ゆゑ人物各獸のはそのをくはみな一太極の分殊ゆゑ氣のうゑゆゑ正通偏塞の美はあるゆゑ人は仁義禮智の性と全〳〵て物



は無智蒙昧ゆゑ仁義禮智の性と全〳〵て物の性人と異あるゝゝゝゝゝゝ氣あるゝゝゝゝゝ理あるゝゝゝゝゝ故ゆゑ中庸或問に人物生生而氣異ゝ其家學の定說あり強ゝべ孟子此章の系註に以氣言則知覺運動人與物若不異也以理言則仁義禮智亦豈物之所得而全哉ゝ此意あるべ人物の異はゝゝゝゝゝ理あるゝゝゝゝゝ氣はゝゝゝゝゝ同じゝゝゝゝゝ中庸註の意しるゝゝゝゝゝ氣質稍と胡雲峯あゝ〳〵あり疏あるべゝゝゝゝゝその說はあり竟聖賢の書はゝゝゝゝゝ理氣の美あり強ゝべ後世の學理ゝゝゝゝゝのとはゝゝゝゝゝ強ゝべ此のごとく齟齬とうとくお

孟子此章の系註云孟子又言若果如此則犬牛与人皆有知覺皆能運動之性皆無仁義之道今子自知之說以非乎不能對也

ふハまことひとしくものなり。告子とくふそうぞそうけハ先傷の意のごとく。知覺運動の生人と物とかそうしるかさこしるべ。おのおの性猶牛之性猶人之性ハ見在當能のみなり。初こそそそ

うつくしむべきのごとく善惡あるべきなり上文に善と又云うく
ん浮うつくしきい糸說をまつとぞ〜てどのつゝ明白あるべし又
牛の喉とぞ犯の性のちがひ〜又云うつくしきい家子の性說は符
合するものあるべきぞ此一章最物うつくしく謂性〜脩古氣
の上は能くとさたる物あるべし異てうつくしの犯の異はいひ
ぐ〜そもそも人孟子要旨〜書と撰也孟子中性
と說諸章と挙らるべし此一章と〜〜そもぞ戲謔の語不完
のごとく〜〜此上は直指人心の說あるべきもつとひと開
〜〜〜〜諸類はあるべきも
告子仮果筍揚韓子の諸子孟子の說は服せ〜〜ぞうつくし
牛竟孟子の說と扶うつくん浮性善〜〜と一驚ようう

〜〜黄〜〜〜〜人の性は善〜いえもまぐ〜〜〜〜何をも
〜〜〜孟子の性善〜のごとき人はただ水の性はあ
〜〜〜〜〜〜〜〜大驚は粋筒〜〜〜〜物の不齊
物を情あるべ下のあふたまくは温泉をあり類あるをあ
もぐ〜〜そもあるうつくしく水の性は〜〜あるいはいえもぐ人の性と
善〜〜〜〜〜〜〜たまくは生あぐ〜の悪人をあるべあ
〜〜〜〜〜〜〜〜

人の一生は一念も悪念なき物にて、やはり善なるものなり。孟子人性善論の中に、ものさしにたとへて、箇々の性悪にて、一人の生涯の中にも、善悪混じて、天下の人の性、一一さまざまあり。揚雄の性善悪混の說、韓退之の性有三品、何れも一招一招なりと云へり。韓退之の性有三品、何れも一招一招なりと云へり。皆本とたづさへて来て逐人の作用さまざまなるとの云へり。孟子の性善の說、人の作用さまざまなるとの云へり。

箇々の性悪にて、人を教へたるとの云へり。

さいわいなるとの云へり。性悪篇に詳なり。人の性悪にて、性善篇に詳なり。

のみとあるとの云へり。たとへば良剣も磨淬と加へざれば利なるべ

名なるを誰なりと加へざれば黑白といふとのあるがごとし。これまことに数の功なり。孟子の虎豹犀象の暴悍なる畜も数にのんじて、何れもてなづけざるなし。人の役なるを性柔順なる人の役なるを性柔順なる人の性と善とをもつて、学問修行の工夫なり。人の性と善とをもつて、学問修行の工夫なり。

附論。もろもろの教をもろもろ兼ねて性の善なる。人の性なるを知りて教をもろもろ兼ねて性の善なる。人の性なるを知りて教をもろもろ兼ねて性の善なる。揚雄の善悪混の說、孟篇の說とあるを

なたてるものなり。詳なる論ぞろふ及ぶべし。韓子の說をもつて人の上なるを知りて人の上なるを知りて人の上なるを知り

ごとく畢竟と推しはかりたくはあるべからざるなれば
ごとく畢竟あるものなり。孟子の側隱羞惡人皆有之
しかるに。皆の字は然りとはいふべからざるなり。天下の人と一はいふべからざる
ものなり。しかるに人の善をもとむるこころの說のごとく人の善をもとむるこころ
なり。孟子の諸子のごとくいろいろあり
荀揚韓のごとく性の名義は聖賢
のごとくなるべからざるなり。そもそも人の生付の上にあるべき
ことなり。宋朱の說は性善惡ともに
を性の名義古書の旨に相違して理と性善惡とを抵
牾賢のごとくに世間の人をひろく示しなきことをべし性
とは人ものの何を世の人の生付ることなるべからざるなり

あることのごとくなり。佛家は世間の相と知るべからざるなり。
世間の義しるべからざるなり。聖人の書何
ぞかくのごとくあるべき程なるべし。曰人生まれて靜已上不容說方說
性時不見性。又李延平曰。初靜真偽善惡皆對而言之。
世之所謂初靜真偽善惡非性之所謂初靜真偽善惡惟
未發於未始有惡之先。性之善可見矣。世間の人のいて
ゆる性とは人ものの生付の性なるべしとなり。故曰。漢唐諸儒不知性之善而性之義不違古宋朱
傷先說性之善而性之義乖古
畢竟荀揚韓の諸子は人の上なる性を知らざるものなり。
人の上なる善惡邪正さまざまあるべし。聖人善しさだめがたし。

そもそもゆへは或は悪しと說或は善悪混と說或こゝに
一定の說あり。孟子は情の上にて見てこまゝ世間のつねなる
ものゝ情をのゝ善とのみ說くゆへ。故に乃若其情則可以爲善矣乃所謂善也と情をよ
つて善といふことのみ詳なり。情の條理よ善し。又右
の指要をもて善と希と
程子の論性不論氣不論性不明二ツ則不足
以意ハ本然の性なりと說く。氣質の不同あることいまだ
詳ならず。性の全純なるを又氣質の性なりと
つゝとつて本然の善なるものゝ
あつて性の義明らかなるものあれど。性と氣とのこゝろ
引ゐるゝ所とこゝろ又こゝろ
のごとくいふことこゝに孟子の性とのこゝろを不竟不
明不徹の善と免ることなくして宋朱の說に及ぶべきなり
し。何ぞ孟子は先儒の說に孟子は本然の善とさゝ
性善し說くのみにて氣質の不同あることさゝ示さるゝ
ゆへ荀揚韓等諸子の說たることもうしいつて孟子
は性と論じて氣と論ぜず。不徹しつゝのみあるゝやまこと
孔子性相近也とのこまふ。先儒これと氣質の性と說ゐ
いつて性と論ぜず。不明しつゝの
ふあるゝや。程朱の說なりの明徹なり。孔子孟子の說と
もふ不明不徹の善とまのあるものとしつゝあるまゝ

あり。是皆後世の性の說なり。聖賢の旨とはかけはなれて。
ひくのごとくさの說有なるこゝあり。朱子諸類に論氣不論
性。孟子言性惡。揚子言善惡混。皆論氣不論性。孟子
言性善。皆論性不論氣。又曰。孟子終身未嘗一言及氣。
こゝにて意見ゑらべし。又支子性相近也。揚子言修身
性善惡。皆論氣。朱子の集註に氣質の高
下ありて。性の本然の善を失ふこと能はざるなり。
詳なるべし。
歐陽永叔云。聖人教人。性邪所先。李翺は言ふ書は
あらず。揚雄山にもとゞ邪しくして行をたゞす。孟子遇人便ち
性善。歐陽永叔都言聖人教人。性邪所先。可謂誤矣。人

性一不可添一物。堯舜所以爲堯舜。率性而已。所謂
率性循天理也。孟子序說にこれを取る。揚雄山にもとゞ性
善とこゝにて。こゝにて人ふかくあるべきを。歐陽子の說今日
しるべしゝ。何ぞ聖人ならざるの今日の上に然れば。日用
當行とゝくいひもとゞ賢人君子の域中に入る。何のいとゞ
こゝにて。そもいかの性善ありて人のよりてあさへをるこれいをの
づからの德をもとゝむこゝにあり。性善の善不善とも
むとしいとゞとゝ。さまざまこゝにて。今日のこゝとにあり
ず。善分とゝんごろ。善なるとゝ。
あらず。そもとゝめんごあふ性善の說おこるたゝんが
良田とあゝて。耕作とゝをせざるあらずそもがのうさ田

地と作り〜てたがや〜結らあとをもつぐ〜。耕作と
さへ精出し〜はたらもりとくんへたく人を田の良とまつぐ〜
とつへぐ〜とのづう〜秋かの得りのあり。百人は聖人
のとく人へ者々を法能業のるとなく。人は者示れて。
性の根本まれあり。たつべ聖人の者性を生〜世とこいふも
ともたりあり。孟子の性善とつて性のなとあること
むとつるあること。性の善あり〜なるとこさるとまつさ
きべ約ひとにてあるふ〜るのあり故は盡知者知
を性也とつの。法世の性とうとこるして第るのあ
程性の中にとつ〜とつ。皆佛家用見性の說とうか
て。聖人の性とのくまへの意〜基善別あり。惡の說のこ

とさこをあり
法世の說は復性とつてあり。又復初とも。凡人の性の
程。本来純粹の善あるとも。物欲に覆はるとつ
あるとく。本体のはとうあるふ移るとく。人欲とこと
あるとこ〜。本性のまこはめふ立ものとあるこ。佛の說は
おとつく。聖人のとく人と天淵南北の違あり。ゆゑ下とくつ
く論来とつるあれば。聖人詳とつるふ及ばこと大程聖
賢のとく人へ。善性の善と本として。陰と成とつる程は示
まつ故は性は然れば善とこ。五支の上は擴充とこ推とこ
達とこ。本にくとつ〜見えこたとつとつるふと流あ
萌蘖は比して。明鏡止水はたとつるは見えこと。今日人性の上

小幼にして見るを幼少の時に無智蒙昧なるを指の市人もなく義理の弁なきを子〳〵と云て長るを父母と云たちの人事と親恵のこゝろ生じ。そこなはれ〳〵て物まなびつゝむるゝこゝろ。次第に成長し〳〵て聖賢教戒の域にもとゝもしべ〳〵。然るに人のせいのさだめよい聖人こゝろざしこゝろのなかにあるもの〳〵をのよいあしきをだに〳〵二聖の教と云て千載の大系しるべしとかつべ〳〵。さるにこゝろ得るの大系こゝにまぐ。先儒の説のをこりをもび人〳〵性のさだめ皆聖人〳〵一般なり物欲に惑はれこゝろふかくこれ人愚人こゝろこゝろ滅じ〳〵はじめなうこゝろと復性こゝろ。法をび幼少なる人こゝろと皆聖人こゝろべ〳〵。二聖の教と云て。即子尋の大系〳〵ふかゞ〳〵。そこいこゝろこゝろに人〳〵さまゞこゝろ程とさしてひこゝろをみて聖賢のこゝろ人事実を教へ示こゝろ〳〵大なるはじこゝろ聖人のこゝろ人のこゝろと教へ見あらはこゝろ教へ進こゝろ功こゝろ後世の学ぶ性こゝろ教へ見あらはこゝろ教へ復初こゝろ教へこゝろけと弁ぜこゝろんあるべ〳〵。

今時幼少のこゝろの書こゝろ〳〵めよい仲呂波こゝろ〳〵ひこゝろ〳〵こゝろ庭訓消息等のこゝろと蔵こゝろ〳〵ひこゝろあるこゝろの四書子経こゝろを素読し〳〵。後よい諸子百家のこゝろを通じ。古今の変と弁へこゝろ。そこ人〳〵事物の理をし〳〵事こゝろ〳〵記憶こゝろ性情こゝろ〳〵人〳〵陰こゝろ〳〵むこゝろ〳〵こゝろ〳〵こゝろ〳〵孝こゝろ廣く見聞こゝろ〳〵。人〳〵有生のさだめ小諸子百家のこゝろ〳〵

胸中に有る物、欲のおもてをかくしてあらはさず、
欲と拂ふくるあるをふあくどそなへいかつ学問に進ることを
長とすべくべくしてあるべし。さて文武の道をあるひは仁
義をたしむ上をとりてそなはるべきあり。一生ところをよろび
さるのみをとりくく百姓を及し。其親敬兄のこと推しくく天
下をまもるとさい。仁義とあるべくく性のくだ
めかへるとしてあるべし。さて佛の說きくく一端あるべしとい
異意実本の地を立ることを。佛氏の說をとりて
法流猶置滅しとあるべくく最初よりの人皆佛あるべきと
本法とこそ忽然としくく三明の達するべくこの世十界を猶
回
知べくくれ史とあるべきと流猶とこそ說とはるべくく寂滅



のこの祇ホ人るを顯滅しとこそいへ佛氏の人說をといてを
たるべく性とるるべきるあるべくくいつを見と空人のたるべく
合をとくいこそたるひたるるあるべくけ四諦摂充の說とあるべく
月人べくく
傷家と復性としてこそ家相の家をたるべきこそ說べくこそ
あるべくこそたるべき前の諸傷を說あるべく。唐の中興と翰字おるを
とこそ人あるべく。官協律郎とるるべく恨律とこそ韓文云の門人
あるべくこそ人復性書二篇と著せるべく文苑英華と垂と性理會通序
の書と全くこそとのたるべくこそ本もしこそ大抵情とはるべくく
性とへるとしてあるべくこそ文と云。情者妄邪与妄則
無所用矣。妄情滅息本性清明。周流六虛。而以謂之復復

之性也。傷者の復性とて。そなはりたる。李翺の昌黎
の門人なれども。孟子よりこれを。藥山の惟儀禪師に示して。
問僧の曰。如何是道。藥山曰。白雲在青天水在瓶と云ふと作り
さる人なれども。復性書の旨。そこなはれたるのみて。
望人性とのたまふの意。大なるまちがひなり。韓文公の原性に。性
言性者。雜佛老而言也。雜佛老而言者。吳言而不吳也
と。當時李翺が。この說世に行はるるふるくいへるこなり。
宋の濂溪の通書に。性要安正。又謂望。
復要執正。又謂賢人。こなたは。復性のこなたは。傷
家の教旨とあるべき。學問の目あるべきを。此に上に編じる通
りなるべし。古聖賢の旨と。天淵のちがひあり。李翺の說。宋朝の



先傷を。孟子の旨よりしばしばこの議あり。孟子をば大要ふたつ
とあるこなり。
或云。論語に克己復禮とあるこなり。孟子小湯武は反之也
とあり。復性と云語は。孟子をもとにして。李翺が作りたる。多く
聖賢の言葉あるこなり。何ぞこれを非とせざるや。但復禮とて
こなたは反復とあり。反復とこなたは物とおなじ
行ひて。物よりの謂なり。そこなはれたる。詳なり。
湯武は反之也。孟子に。又說拔とあり。孟子に。
二とこなたあり。一つは湯武。一つは湯武
反之也。反之也。反之也。
あり。反求とあり。
反求とあり。

のいひあらぶ。又他書に就て不庸に反諸所不誠不順乎親
矣とあり。易説卦の大象に若子以反所修法とあり。礼記樂記の
篇に不能反躬而天理滅矣とあり。孟子に子之不善人者待矣とあり。
引て自反而縮雖千萬人吾往矣とあり。彼是相反して考へ
ふかめ人に或は反と云或は所ふかとあり。或は反所とあり。也
性一番とく反求しとく身と考しるとあり。復性
の説授とあり。

荘子に曰く謂性と。案註に云。與近世佛氏所謂作用是性
者略相似。如漢字義云佛氏把作用是性便喚蠢動含靈
皆有佛性。運水搬柴無非妙用不過只認得箇氣而不說着
那理耳。とあり。是より後の學者。多くは言に從て傷者の



性とは佛者のたぐひ傷者は性を本然氣質の二つに
あつて本然とは理なり。氣質とは氣なり。佛氏はただ氣を性
とし理なしとの説の傳灯録に曰く達磨の波斯匿王に言つて曰
名人在眼曰見在耳曰聞在鼻曰香在口曰在脣為所。如世
在之運奇徧現俱該沙界收攝在一微塵識者知是佛性不
識者喚作精魂とあり。是ハ佛氏は氣を性とし
て性とせるなり。程子云初の作用なるは皆佛
性のたてまつりしなり。徧現とは俱該沙界と
いふとみるべし。先傷ハ作用をもて性と名

付るゝ心清くまろうみうるおしあるべしと。たゝかあるべし。
えつて後世の所謂本然の性とこゝのよちうゝ。仏家
ふ本性去性等のこゝ和ふるあつ何を作用とゝして性く
いつるゝ見えべそ上生ゝ謂性とゝて。紫運初と註せ
らるゝ生ゝ清ゝ。生の字よハ生死の生あつ生薬乃
生あつ。若ハ人の生を付ゝ性とゝ性ゝ。ゝ清く。善
悪の差別あるゝとゝ。孟子こゝをとさゝんゝ。白羽
白雪等のたゝ人ゝ。六牛の性人ゝ。ゝ活初
ゝくうゝさはゝくゝと生ゝいつよあゝ。拙きべ
生ゝ謂性とゝハ生薬のゝあゝ生活の生ふあゝ。先傷
生活のゝ見えるふゝ作用を性の説とちうゝ

あるハ本文よあゝ。
大抵聖賢のゝ人ハ皆人ゝ然ゝとゝ。
ゝ性ゝ云理ゝ云何を人の上ゝ然ゝ。中庸ゝ万物
ゝ性ゝ。ゝ人の世ゝ本下ゝ本ゝ。
本名歌ゝ。とのゝ生ゝ。
赤人ゝの内のゝ後世ゝ理の説ゝ。人
の性ゝ物の性ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ人物の性理氣ゝの説ゝ正
通偏塞等の弁ゝ。ゝ中庸の本性ゝ。
人ゝ物ゝ。ゝ解ゝ。ゝ思の差ハ。ゝ人
の性ゝ。ゝ。ゝ物ゝ。ゝ。

拾要ふ詳なあるべしあるべし

或云子貢曰夫子之文章可得而聞也性与天道
妙ハ初学のおよぶ所にあらざる貴賤幸ふいたり
て奥ふかく微しく独をべ性とつくること。
孟子のところハ人の生を性と性
とつくれどのこハ雑とくを去り得べし曰独をべ。元来傷
の性てをのるを向上なん得べきもとのごく
こと説あるをどを尤なハあるべき惣別人のこと祭ハ相通用
てもるべし望人のこと祭ハ人のこと祭ハ
ことをもるむとせば諸説のもとをもるべ
べし。諸説ハ性の説多くハ人のこと。たゞ性相近也習相遠也の

一諸説あるのなり有教無類とつくるこれ人ごとに性といふこと
どを性相近の諸説一般に二説ふ人の性ハ善とをれば
ふるべきもとをもるべきもの説ハ
つまるもの孟子の性善の説ハ
をば孟子の性善説ハ
何とてを人ハ性善ものとのこと
生を付るとくに人ハ人ごとのもの独と
常々ふ中のまるとくに不得而聞也といふるもの性
もてをのこと人ハ性善ものとのこと
性の必善をもむべくてをのもの
のこまるもの孟子ハ性善説

なるふあくどぢら他のあくなるものあり
ど善人は福をなすことと深くなるものなりこゝろ善な
領業せてゆざるあるいはく不可得而聞也云
ゆ幸結盟字義小結じ　聰明正直仁
熟智至者不能識之　智恵料簡と以て
ちうづくこのふあくどろ法純熟の上なあくまべ誠な
ちうゆくこのふあくどしてこゝろの條下ふとるまことと論どれ
ごとゆ性とこゝをふ準どべ　何でなまべ至人は深くこゝろと脱
て仕業　智ちうゆくこゝろ他の間どこゝろゆ善なあくどこゝ
こゝろ　後ろ思ふ人の性ゆどこゝろ　こゝろ　これい善なこゝろ
く善とこゝろこゝろ　こゝろ　こゝろ　こ

人をそなへ性をふ給ひとまれるものもあるもの人下
活せるもの人くれるもの人をたぐへ人
仁熟智愚の人のもの人をそなへ人

情　九九則

情とは人の上に於て思慮安排なくして生ずる情
きもの人いつくの人の上に於て世間の人の為
ぶるいつくの人の上に於て礼運の篇に何謂人情喜怒哀樂愛惡
欲七者不学而能とあるもの人情
の説なり人に来殺と性と情と已殺と情と定めるいまも法
ん流性情の説なり宋朱子の説一定しなり
くは説と字也とあるもの人の上に章あるもの人抵宋儒の説



とふ体用理氣来殺已殺の分と立るもの人の
言なり人の上に氣といひ理といひ用といひ
体といひ先傷の説なり来殺の説なり
つ性は体情は用なり初辞とは動を辞るを皆ふ
外なるもの人礒水の辞なり性則水なり辞情則動なり初理学類編
こと取又曰性者人之理情者人之用と性理学義
と取たとへば性はあの器中にあるごとく情はあの流出
あるごとし当人の働と情と強也と古書と考る
ふ性情の分別は初辞の謂ふあるごとく性収斂なり
とるべし

同說之未發と性と已發と情と云ふ孟子情と云ふ
性の善と云ふことしいたくへい極の善と云ふ
とちがひ〳〵已發の情本〳〵善とあるべく〳〵して惡とあるとの
へうこゝろふうつて未發の性の理善あることとちがひ
独見ごとに已發の上ふへをつとを善とをあせごとに又惡とを
あるとをつて世間の人孟子性善の說とうけがごとに云ふ都
善ふ以來荀揚韓等の諸儒さまく〳〵の說ひあるをいとけか
つて若し都みとして已發の情よい善あり惡あり独見ごと性の
本体よい善惡の二ツ兼備るやうに同じこれい孟子の說畢竟揚
子の善惡混の說と為て性善の說ごとに後世の說よい已發の上
ふあり惡い隔溺とつてこのみて性の本体ふあるごとしいへごと

已又已發已後のみあるべい情ふあるごとに性ふ
孟子の情と以て性の善と云ふ性善と云ふことし未發已發の義分
ふあるごとしちがへ
或伝孟子情ふうつて性善とちがへことし未發已發の義分
あるごとい何と以て性の善とちがへやい情といふものい人の思
慮安排ふつてこゝとして生ずる付のまゝあるところあり情て
を物の本性いはゝてうて上ふまく及べし。あく換じうこと
いつて及ごとこゝらへかゝりうこと本性ふあるごとたゞかゝり
ふあくそこふひをせれところふあて。本性ちがへべし。情とつても
のいへかゝりをあくそんじもせわところのんふをべそふみて人
の本性とちがへべし。故云乃若其情則可以為善矣乃不謂

善惡とたゝくべきところなり。然ればこゝに性とあるは、人の生まれつきのまゝにて、又さまざまあるべきなり。又性とは、枝のまゝの枝付の本と、木の中くゞれるを、本性とあるべし。書経の本曰曲直とそなへ、情をその変ずるなり。性とつゝべし。書経の本曰曲直とそなへ、情をその変ずるなり。

ゆゑにこゝにあらはれたるこゝろを、性とあらはれたるこゝろを、てゝ性と

おこるなんぞをそなへ思慮安排をおもひんとしいとべく
して情といふべきなり後記礼運篇に喜怒哀楽を悪欲七
者不学而能の七情といふあり自らきづく已数来数の
名目あるなり
情は人の喜怒のこころあり善を好み悪を恶むは人の喜怒のこころ
なり色を好み食を嗜むは人のまこと
こころなり情とは人情欲情なり
云多く男女子の間のあはひをいふ
あり色は約情節情のこと
とくに男女の間なり
情陰陽と分れこれを情欲の情は

つまり善悪とこの二悪とをくむは人のまことなれ
ば又情とはつまるところ
或問論語に云ふ苟得を情則哀矜而勿喜とあるこれいかなる
なるや上とあざけりの情あり後世情とはいふ善しいふも
ぞ問云ふ結ひあり情にあるべきと念ようなるべし何ぞ
を人の好悪の喜怒あるをいふ良心をいふ人の上
ふ結ひ云性善とは氣質の上より結ひ云ふべし
何ぞ孟子の中に情喜怒哀楽と云ふ又五父よりのまこと
とふ預ねとは情預と云ふこと
ぞ云ふべし人のこころの中にあるべきこころなり
いふ後世情とは苟得を情とはいふ

むさぼり欲とゝろいつる對ゝ正体のこゝろと情と
いつ孟子の情と云ゝのこゝまこゝろとゝ人のさまゝ〳〵あるをゝ正体
のまことゝいへゝこゝをのゝいつ意ゝ情と云ゝこゝろ
つゝこゝろやうのをゝゝ所ゝこゝ
大歎んと情と甚ゝこゝ差別あゝ〳〵ゝ人ゝこゝいひても
情といひゝこゝを通用ゝこゝ
らゝてんゝこゝいゝをゝゝ情ゝいゝをゝこゝろあゝ異意
不自然の差別あゝたゝ父母の長命あゝんゝとゝ孫
の孫明あゝんゝと孫ひ人の仕合ゝこゝ悦び人の新婚を
ていへ笑ゝ人の情あゝ又人ゝこゝ
ゝこゝ人のあゝこゝと悦び人

のゝこゝゝとゝ称むの類いをゝんゝあゝこゝあゝべんゝあ
らゝゝとゝいゝをゝゝ結をゝゝと情とゝいひゝ〳〵皆換〳〵
斃ゝこゝのゝゝ生付のゝこゝゝこゝろゝあゝゝ孟子ゝ性豈人
ゝ情ゝゝ云ゝ後世のゝこゝゝゝ人情不近人情とゝの類
皆ゝをゝあゝこゝをゝゝ情のゝゝあゝこゝゝゝゝゝ
後晁錯が上書ゝゝ人情莫不欲壽而生而不傷人情
莫不欲富而多而不困人情莫不欲安而佚而不危人情莫
不欲逸而節而不盡又程子遺書云欲富貴者人之所同也賢者不欲都反
人情云ゝこゝゝゝ情の字の日本ゝゝ明あゝたゝんの数
と情といゝあゝゝこゝゝゝゝゝ又音の謝安が苻堅肥あゝの
戦ゝ姪謝玄と遣ゝゝゝゝゝゝゝゝ客ゝ對ゝゝ

碁をうつぞ時は敵とやうろのたれうをぞ見ぬ破敵て
いひてくさつぐるぞ敵と敵と敵と